２０２４年３月１７日　青戸教会　「光の子」
イザヤ６３章１～９節、ヨハネ福音書１２章２０～３６節

高橋克樹牧師

先ほど、読まれたヨハネ福音書の２４節は私が個人的に一番好きな聖書個所です。２４節冒頭の「はっきり言っておく」の原語は、「アーメン、アーメン、レゴー、ヒューミーン」で、この言葉はイエスが決定的に重要なことを言う際に、言われる言葉なのです。この言葉の次に語られる言葉は重要な真理を含んでいる言葉なのです。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」。この言葉は農夫の手から離れて、地に落ちる一粒の麦の様子を描いた、ありふれた田園風景の一コマを描いた普通の言葉です。種を蒔く農夫の働きを描いた言葉ではなく、一粒に秘められている「いのち」の行方についての言葉です。一粒が死ねば、豊かな実を結びます。逆に死ななければ一粒のままです。

蒔かれた種がそのままであれば、やがては腐って終わりです。しかし、土の中に落ちれば、種はくだかれて新しい命が芽吹きます。

これを人間にたとえるならば、人間にとって死ぬことは一大事であり、死ねば一巻の終わりです。そして、一人の人間が死ぬことで、多くの人に豊かな実が実るということはありません。けれども、従来の自分の生き方に死ぬということは、私たち信仰者にとっては、洗礼を受ける前によく経験することです。それまでの自分の生き方に行き詰ることは、象徴的に自分自身に死ぬことになります。その時、新たにイエスの贖いによって生かされた自分を見出すことができたならば、洗礼によって新しい自分に生まれ変わることができます。そういう意味で、私たちは、自分自身に死ぬことで、新たに生まれ変わることができるのです。けれども、これは単に、従来の自分の生き方を反省したから、新たに生まれ変わるということではないのです。

「洟を垂らした神」という小説で有名な吉野せいの短編に「梨花」（りか）という作品があります。４１年前にわずか８カ月で亡くなった４人目の子どもである梨花の最期の８日間のことが克明に描かれています。小さな命の輝きと母親ならではの深い思いやりが生き生きと伝わってきます。この作品の終盤のところで、亡くなるときに「梨花は百姓の子だぞ。いばって土になれよ」と言われるのですが、著者自身は「梨花、さようなら。土にかえれよな」と言うのです。決して、土にかえるわけではないのですが、吉野自身が夫と共に開墾者であったために、死んだら、土にかえるということを自然と前提にしているのでしょう。土にかえることで、永遠の命を得るような内容になっています。

この作品のように子どもが早世してしまうこともありますが、吉野せいのように、たとえ８カ月といえども、その生きた様子を克明に書いて、その生きた痕跡を残すことで、その死を永遠の命に生まれ変わらせることができるのです。特に、私たちキリスト者は、一粒の種のように自分自身が小さな存在であることを自覚している者ですが、自分の存在自体に神の御業が現れていることを覚えている存在です。イエスが語っているように、一粒の麦の種自体が何らかの主体的な意思をもって豊かな実を結ぶ存在ではないことが、このイエスの言葉の前提としてあります。いわば、神の御業がこの一粒の種に現れて、多くの実を結ぶ結果がもたらされることを言い表しているのです。もちろん、一粒の種が土の中で死ぬことで、生物学的にたくさんの実を結ぶことになるのですが、イエスはそこに神の御業が働いている恵みを言い表しているのです。

私たちキリスト者は、自分の主体的な意思を捨てているわけではありませんが、神が今の自分をどのように用いて、この世で争いがなくなり、平和が実現することが神の御旨であることを知らされている者たちです。神の意志は、この世に神の意志を表そうとしているかをいつも自覚しながら生きている者たちです。ですから、この世的な争いから一歩身を引くように生きているわけですが、この世では、悪意を持って他人に関わる人たちが一定程度いるわけです。自民党との癒着が明らかになった統一協会などの活動

には警告を発しなければなりません。今は、依然と随分違ってその活動が一般人の財産を略奪する組織としての認識が浸透しましたが、私が青戸教会に赴任した頃には、そうした認識があまりなく、シンフォニーヒルズで、統一協会が当時使っていた、家庭連合名でクリスマス礼拝をしていることを知って、その施設に、家庭連合は統一協会が隠れ蓑に使っている組織であって、区の施設が被害者を創り出す組織に施設を貸し出すことはやめるべきだと私は連絡したことがありましたが、当時は担当者はその問題性に気づいておらず、家庭連合クリスマス礼拝に施設を貸していました。現在はさすがにそういうことはありませんが、もっと社会でどのような悪質な組織がうごめいているか、を公共施設の担当者はリサーチしておくべきだと思いました。税金で建てられた施設を悪徳業者に安く使わることがないように気をつけてもらいたいものです。そういう悪徳業者や反社会的組織が公共施設を使うのは、住民に無意識のうちに安全性をアピールする意図があるからです。

私が統一協会の被害に敏感なのは、統一協会が昭和の時代に全国で印鑑や壺を法外な値段で売って、被害者をたくさん出していたからですし、私が信徒時代に属していた北海教区では牧師たちが、統一協会に洗脳されている人たちを救出する活動をたくさんしていたのを見ていたからです。そのような活動は被害に遭った人たちがいても、その脇を通り過ぎてもある意味構わないわけです。

けれども、私たちは神の導きによって、イエスがこの世に神の支配が現れているという福音を宣べ伝えたように、この世に神の支配を確立させるために十字架にかかって下さった恵みに預かっている者たちです。いわば、神によってこの世に神の意志を現わすために光の子として、この世の闇を照らす働きを担っているのです。

聖書を見てみましょう。一粒の麦の話に続いて、２５節では「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」とイエスは言います。さらに２６節で、２イエスは「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる」と言っています。２５節で自分の命を愛する者は、それを失う」と言う箇所は、「自分の命に愛着する者は、それを失う」という意味です。自分の命を保つことだけに汲々とする生き方をするならば、いつしか、自分の命をも失ってしまうとイエスは言っているのです。

このようなやり取りの後、イエスは十字架にかかって死んでいくことを群衆に示そうとされて、ご自分が天に上げられることを話すのですが、それを聞いていた群衆は、その言葉を受け入れません。それに対してイエスは３５節、３６節で次のように言われるのです。「光は、今しばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くかわからない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と言っています。ここでの光というのは、イエスのことです。私たちがイエスのもとで生きていく限り。この世に闇はなく、様々な困難があっても、進むべき道を見失うことはありません。たとえ、人間的には自分にとって損な道を歩んでいるように思えたとしても、それはイエスが指し示してくれた道なのです。そして、そのような道を歩んでいく者として、この世を暗闇に引きずり込むような悪の勢力には断固として否を突きつけなければなりません。

私たちは神の子である主イエスによって光の子として召された者たちです。私たちを取り巻くこの世の闇に対して、毅然とした態度で臨むことが光の子としての役割です。そのように召してくださった神の守りの中で、この世に対して自分のなすべき業を行っていくことが、結果として、神が自分の人生に御業を現わしてくださることに結びついていくのです。この世での役割を終えて、天に召されていく時、自分の一生を神に喜ばれるものとして、おささげすることができるように、この世で光の子としての歩みをそれぞれの仕方でなしていきたいと願うものです。